

## 日本語版刊行記念

ジュディス・ヒューマン自伝

# 『わたしが人間であるために

## 障害者の公民権運動を闘った「私たち」の物語』

“ジュディ” ことジュディス・ヒューマンについて

～彼女をよく知る3人の鼎談～

ジュディの自伝翻訳者 曾田夏記（自立生活センター STEP えどがわ）

鼎談者：ジュディと5年間世界銀行で一緒に働いていた 盛上真美（JIL 事務局）

30年前からジュディに憧れていた 佐藤 聡（DPI 日本会議事務局長）

文字起こし：福嶋, 小牧

編集：上妻, 川崎

（自立生活センター・てくてく）



佐藤さん、曾田さん、盛上さんがテーブルを囲んで座っている（2021年7月1日、DPI 日本会議事務所にて）

### ■ジュディとの出会い

佐藤：ジュディさんの本の出版記念で、本人がいないのに本人について語るという、当事者抜きで。（一同大笑い）

曾田：勝手に語る…

佐藤：私がジュディに初めて会ったのは1991年でした。大阪の芦原橋にあるヒューマインドでジュディの講演会があり、聴きに行ったのです。そのときに、講演の休憩時間にジュディが控室に戻るじゃん？

曾田：はい、はい。

佐藤：廊下に俺たち障害者がたむろしているんだけど、当時は運動を始めたばかりの駆け出しで、なんというか、下っ端の障害者が…（一同大笑い）、偉くもなんともない

普通の障害者がたむろしているんだけど、ジュディはそこを通るたびに必ず一人ひとりの障害者に声をかけていくのです。この人、今まで会った外国の障害者と違うなあ、と思ったのです。障害者全員に声をかけるというのがすごく印象的で、今もよく覚えています。

尼崎に玉置くんという筋ジスの子がいて、普通高校を受験したんだけど、障害を理由に落とされたのです。明日ジュディが尼崎市の教育委員会に交渉に行くからみんな来てくださいと呼びかけていて、俺も行ったら、定藤先生とともにジュディがやってきて、交渉をガンガンやっていました（一同笑）。この人、ほかの国でも本気で交渉やるんだな、すごいなあ。どの国でも差別は許せないという、すごい勢いを感じました。それが最初の出会いですね。曾田さんはどうですか？

曾田：最初の出会いはADA25 ツアー（2015年夏）です。最終日かな、若手とジュディとで話せる機会がありました。

佐藤：ジュディのこと知っていた？

曾田：名前はもちろん知っていて「本物に会えるんだ」みたいな感じでした。当時、私はまだ JICA で働いていたので「JICA で働いています。でも、フィリピンにいて障害者運動に興味が出てきて・・・」っていう話をしました。その時に「障害者団体で働く経験と、政府機関とか外で働く経験と、両方とも絶対役に立つから大切にしないさい」って言ってもらいました。その時は「二足のわらじ」じゃないけれど、両方ががんばりなさい、という意味だと受け止めました。でも、自伝を読んで、ジュディが議員事務所とか色々な行政機関で働いた経験がどう障害者運動に活かされたかを振り返る場面があって「あ、そういうことだったのか」とあらためて感じました。「両方の経験がちゃんと役立つよ」と言われたことをすごく覚えています。その時間だけです。ジュディと最初出会ったのは。

佐藤：ほんのちょっとだけだったね、じゃあ。

曾田：ほんのちょっとでした、なんか二、三分話して、ツーショット撮って終わり。みたいな…（笑）。

佐藤：あのときは、JICA の仕事があったから長くいられたんじゃないかな。でも、行ってよかったね。

曾田：よかったですね。仲良くなるのはそのあとですね。毎年、通訳係でアメリカ行って、ジュディのお家行ったり。

佐藤：まさみは？

盛上：私はアメリカのジャスティン・ダートさんのところに行ったのが95年の夏なんです。ダート家は毎年、サンクスギビング（11月末の感謝祭）はジュディの家に行くって決まっていた。行かないとジュディからハラスメントのように電話がかかってくるから（笑）。それがたぶん最初だと思います。私がダート家で電話番していると“it's Judy”って電話がよくかかっていたのです。その後会って「あ、この人があのジュディね」みたいな感じで。サンクスギビングには私たち日本人は寿司を作って持っていく、というのが任務でした。

佐藤：寿司屋でもないのに（笑）

盛上：寿司を食べるために呼ばれているのかな、つてのがだんだんわかってくるんですけど（笑）。ジュディのあのフレンドリーさっていうのは全く変わらない。ずっとあのまんまですね、最初から。

佐藤：まさみはそのあと、ジュディと一緒に働いていたでしょ？世界銀行で。

盛上：はい。

佐藤：その辺の経緯教えて。

盛上：ダートのところにいると、ジュディといろんなイベントで一緒になるので、もうしっかり覚えてもらっていて。けど、ダートさんがいるから会うっていうくらいの付き合いしかなかったんですけども、ちょうどジュディが世銀に入るっていう頃に私は大学院を終わって、もう日本に帰ろうとしていたんですよ。5月頃で卒業式まであと1~2週間ぐらいって頃に、いきなり電話がかかってきて「なにしてんの？」「えっ？もう卒業するので日本に帰ります」って言ったら「明日、〇〇に来て」って言われて「はい」って言って、行ったのが世銀のビルだったの。

佐藤：曾田：へえー。

盛上：全く何も知らないで行ったんですけど…、そこでジュディから「自分はここで、初めて立ち上がる障害と開発という部署ができて、6月から入る」と。で、まさみはいつから来られるか？って言われて（笑）「えーっ？」ってなって、はい、そういう経緯です。ちょっと迷ったんですけど…。

佐藤：それで日本帰るのやめたの？

盛上：そうですね…

佐藤：よく決断したね。

盛上：いやー、そりゃ、もう、すごい迷ったんですけど、正直、日本に帰りたいんですけど、もう、日本の温泉とお寿司が恋しくて。帰る帰る、って思っていたんですけど、なんでだろ…。ジュディと話したときに「今後何したいんだ？」って言われたときに、正直、私もまだそんなに固まったものがあつたわけじゃないんで、ここまでダートとやってきて、運動を見てきて、もっとこれから世界の運動を見たいと思わないか、って言われて（笑）。

正直もう、ダートのつながりだから、そういう意味ではジュディと働くことに何の不安もなく。なんでかなあ、ちょっとよくわからないんですけど。せっかくいただいた機会だから、じゃあちょっと、まあ、がんばってみようかな、って。

## ■ジュディとの旅路 こだわっているところ

佐藤：どんな国行ったの？

盛上：インドとか、アフリカも、エチオピア、カメルーンとか。飛行機から降りれるの？っていうところから行くんですけど、まずトイレはないと見込んで。トイレがないところで、いかにトイレ行くかで、バケツと毛布でジュディをこう囲んで、とか、そういう準備をいっぱいしてて（笑）。

面白かったのが、インドとかアフリカ行くときの飛行機の乗り換えで、特に国内線は小さい飛行機なんでボーディングブリッジ（空港から飛行機に乗り込む搭乗橋）がないんですよ。だからだいたい階段ですよ。でもジュディは、絶対抱えるのはダメ。自分の車いす持ってこいと職員に言うのです。これ、どうすんだろうな～って私もドキドキして見ていたの。いやー、そうは言ってもないから無理じゃないかなあって思いながら。実はいざとなったらジュディを一人で抱える練習もジュディにさせられていたんですよ。だから、飛行機の中でトイレ行くのは抱えていくし。意外なことに、インド、アフリカは、あのフードを運ぶトラック（荷台が上下する）を使えばいいですね、って、すぐ持ってくるんですよ。だから、すごい心配していたインド、アフリカでは全く揉めなかったんですよ。拍子抜けするぐらいで。意外や意外、ドイツと日本で「絶対だめです。これには、お客様は載せられません。こういうルールです」って言って3時間以上粘るんだ。だからそこで、やっぱりバリアはお金ではなくて（頭を指さして）ここだな、って実感した。

佐藤：人間ね。

盛上：お金のない国はバリアは全然問題なくて。無いなりに工夫してやるから。けども、先進国になると、もうルールがあると絶対だめって言われる。このジュディの取り組みは、先進国を含めてバリアを解消していくための活動なんだな、というのがだんだんわかってくるんですよ、旅をしながら。

佐藤：そういう制限やバリアを作っているのは人間の側だということね。でもさあ、3時間も粘るの？

盛上：粘る。ドイツとかフランスは、たかだか席から通路に移るあれも、手伝ってくれればいいんでしょうけど、空港のフライトアテンダントがやっちゃいけないルールがあるんですよ。赤十字のマークをつけた空港の医療スタッフがくるっていうルールがあって、毎回ジュディは「わたしは病人じゃないんですけどね」って言いながら…

佐藤：曾田：(笑)

盛上：自分の車いすが飛行機を出たところに来るまでは、絶対空港スタッフに自分を触らせないで待ってるんですよ。

佐藤：曾田：へえー

盛上：私は、出口とジュディのところを行ったり来たりして、まだ来てない、まだ来てないって言って。ときどきフライトアテンダントは嘘つくんですよ「もうそこまで来てるからどうぞ」とか言うんですけど、ジュディは“Masami!” 私が“Not yet!” (まだ!) とか言って、見て、車いすが壊れてないか全部確かめてからジュディを呼ぶっていう。

佐藤：曾田：ふーん。

盛上：そこで私がちょっと途中でひるむと、あとでジュディに「そこはひるんじやいけない」と言われるんです。

佐藤：すごいね。俺は途中で妥協しちゃうけどねえ…。そういうところがすごいねえ。なかなか粘れないよ。次の予定も考えたりすると。疲れてるし、もう早くホテル行って寝よっかなあとか…。

盛上：そうだよね。でも、たぶん妥協できるところを見せちゃうと、やっぱりそれを空港スタッフは望んでくるから…。絶対だめなんだっていうことをジュディは見せたいのだと思いますねえ。

佐藤：すごいね、それ。ずーっと、やっているんだね。

盛上：はい。

佐藤：どこに行ってもやる?

盛上：どこに行ってもやりますね。友達とバーに行ってバーは入れたんですよ。だけど、トイレに行くのに一段だけ段があったんです。トイレは広かったんですよ。だけど、段があるからトイレ行けなくて。そしたらマネージャー呼んでこいって言って「ここにスロープ設置して、ここはカットして…」とかいろいろ言って。仕事なら分かるんですけど、友達と一緒に来ているから。もう、友達も「またか…」っていう私から見ても明らかに分かるくらい、うんざりした顔をしてるんですけど…

佐藤：曾田：(笑)

盛上：だから、ジュディもそれ見ているんだけど、絶対それを止めないで…。それはね、私、さすがに「すごいな」ってジュディに言ったら『自分が一生の間に行ける場所は限られている』と。『自分が行ったところが必ずバリアフリーになれば、みんながそれをすれば全部バリアフリーになる』って言うんです。インドのニューデリーのマクドナルドをバリアフリーにしましたよ。

佐藤：ほんと?(笑)

盛上：ジュディはマクドナルドとかファストフード嫌いなんだよ。すごい身体に気を付けるから、私がそういうの食べてたら怒るんだけど、マクドナルドはアメリカの会社で絶対バリアフリーでないといけないうのがジュディはあるから、ニューデリーでマックの前通ったときに、階段だったんですよ。で、店員に「ここ、バリアフリーにして。しとかな

いとマックの本部に言いつけるから。私はこれからインド内部に出張に出かけるから、5日後に帰ってきてまたチェックにくるからやっつけ」って言って、行ったんですよ。それで帰ってきて「まさかな」と思ったんですけど、ほんとにスロープついたんですよ。

佐藤：へー、すごいね。

盛上：立派なスロープを作って置いていたのです。すぐに出せるんですけど、見えないところに保管していて、スロープがあるということを表記していないんですよ。そしたら、ジュディは「スロープあります」ってちゃんと書いて言って。世銀に帰ってから報告書に「インドのマクドナルドがバリアフリーになりました」と報告したんですけど…。

## ■印象に残っていること

佐藤：2014年にJDFフォーラムでジュディが来日したんだよね。せっかく来るから、各地でも講演したんだけど、ちょうどその時、障害者差別解消法の対応要領・対応指針を各省庁が作ってたんだよね。そのパブコメを募集している時で、ジュディがそれを誰かに聞いたんだよね。そしたら、ジュディは講演の度に、必ず最初に「みなさん。今、日本は差別解消法が通って、対応要領、対応指針を作っています。いまパブコメを募集してますよ。みなさん意見出しましたか? 出した人、手を挙げて?」って、みんな手を挙げてさせられるんよ(笑)。ほんで、全然出してないから「みなさん、今日帰って、まず素案を読んで意見を出してください」って、毎回言うの。

俺もパブコメ始まった時はみんなに呼びかけていたけど、全部の省庁がやるから、けっこうな量なのよ。書く方も大変だから、まあ、そんなに集められないかなと思って途中からちょっと気を抜いて呼びかけなくなっていたんだけど、ジュディはどこに行っても日本人より先に常に言うから「運動家って、こうじゃなきゃダメなんだな」と思って、俺も諦めたらアカンなって反省して、そこから言うようになって、自分でも書くようになった。そのときのパブコメが過去最高に集まったらしいよ。運動家は凄いな、どの国に行ってもやってんだっていうのはびっくりしました。曾田さんは?

曾田：2017年のADA27 若手ツアーに行った時、ジュディが一人ひとりを大切にすし、運動に関してみんなが役割



鼎談中の佐藤さん

持っているって思っているんだな、っていうのをすごく感じたことです。最終日、みんなでホテルのロビーにたむろしていたら、ジュディがたまたまサーツと降りてきて。ジュディと約束があった訳ではないので「みんなバイバイ〜」で通り過ぎてものにも、またみんなとわちゃっと話しくれていて。一人ひとりと話しはじめたので、私、みんなの通訳していたんですけど、その輪からちよ



鼎談中の曾田さん  
英語版のジュディの自伝を持っている

っと離れたところに木村由美さんがいて。その時、由美さんが（視覚障害があるので）ジュディがいるという情報を得られていたかわからなくて。で、一人ひとりと話したあと、ジュディの方から電動車いすですーっと由美さんのところに行っただけです。私も通訳として一緒に行って。そしたら「今回、何日間かいたでしょ？きちんと情報保障得られた？」とか、由美さんが受験時の合理的配慮の相談をちょっとした

ら「それって、日本の差別解消法でどうやって闘えるの？」とか。日本ではどんな生活をしているのかとか、もう純粋に由美さんに興味があるんだな～っていう感じで話していたのが印象的でした。あと「アメリカの障害者リーダーたちと話せましたか？」とジュディが聞いた時、由美さんが、「今、ジュディさんが初めてです」って言ったんですね。その時「ああ、やっぱり情報保障が足りなかったんだな・・・」というのは感じて。由美さんがそのあと「すごい嬉しかった」と言っていたのが心に残っていて。ジュディとの思い出って、みんな、一人ひとりエピソード持ってるじゃないですか。それって、ジュディの接し方がほんとに一人ひとりと気持ちをもって対面しているから残るものかな、と思って。それがすごい印象に残っていますね。ジュディってすごいなと思った。

盛上：私、一つだけ、今日絶対話したいことがあるの。

佐藤：曾田：どうぞ。

盛上：私はジュディと4年半から5年ぐらい一緒に働いて、一緒に旅をした中で、やっぱり、一番印象に残ってるのがエチオピアに行った時のことなんです。ジュディはどこ行っても道ばたの障害者を見つけると、外務省とかに絶対、そっちに近づかないように誘導されてるんですよ。ジュディはそれを無視してスーッと道端の障害者のところに行き、話しかけるんです。いつも。ここでの生活どうなんだ、っていうことを、ほんとに興味があって聞いてるし、その人達によいインパクトがなければどんなに政府がかっこいいこと言たって意味ないってところで、すごく関心を持ってたと思うんだよね。

だから、いつもそういうジュディを見てきて、そういうジュディなんだってことは分かって、十分分かって旅もしてきた経過があるんですけど、エチオピアに行ったときに、夜、ほら、障害者団体の人たちとごはんとか行くじゃないですか？

曾田：うんうん。

盛上：そこで、エチオピアにも日本というJDFみたいないろんな障害者団体が連携している団体があって、いろんな団体の人が出てきてジュディと会食ってなったんですね。

レストラン借り切って、ジュディは一人だからあちこちの人に話に行きながらやってただけで、私はたまたま手話ができただけで、聞こえない人達と一緒にいて、あんまりよ

く考えないで、楽しくごはんしてたんです。そしたらジュディもちょっときて、ちょっと手話できるから少し手話で話したりして。で、楽しい夜だったなあ、くらいに思っていたんです。ホテルに帰ってきてジュディと私の二人だけになって夜の準備してる時に（少し泣きそうな感じになる）、ジュディが泣き出したんですよ。

佐藤：曾田：うーん。

盛上：涙流して、私が、っていうか手話ができるスタッフがいてほんとによかったって言って『一緒に来てくれてありがとう』って私に言ってくれて、すごい泣いたんですよ、ジュディが。

曾田：うん。

盛上：えーって思ってびっくりしたんだけど、やっぱりジュディは他の国に行って、障害者みんなをやっぱりウェルカムしたいって。だからそういうときに、聞こえない人っていうのはやっぱりどうしても会話に入れず外れがち。だけど、こうやってスタッフにいろんなスキルを持ったスタッフがいるから、ほんとに今日は、ほんとによかったって言って…。泣いてたんですよ。

曾田：うん。

盛上：私、それを聞いたときは本当に、この人は障害者が一緒になって運動していく、連帯していくことに情熱を持っている人だなんて。それはね、忘れられないですね。

佐藤：もうここで終わっていいぐらいいい話だね。（一同大笑い）

曾田：（まさみはインタビュー前に泣いちゃうかもと言っていたけど）やっぱり泣いちゃいましたね。

佐藤：一人一人をととても大切にしている人だよ。道端の障害者を連れてくるんだもんね。いつも連れてくるんですよ？

盛上：そうそう。連れてきて政府との会議に入れちゃって。もう明らかに政府の人たちは動揺してるの。「誰ですか、この人？ IDも持ってないじゃないですか」みたいな。なんだっけ？武器のチェックするやつ。ジュディが「そのセキュリティチェックに通ればいいですよ。何も持ってない」って言って、確かに何も持ってない（笑）。

佐藤：すごいねー。



鼎談中の盛上さん

## ■本の話

佐藤：本の話も聞こうと思うんですけど、曾田さん、何で訳そうと思ったの？最初に英語で読んだ？

曾田：最初英語で読みました。盛上さんから紹介されて、読みましたね。

佐藤：それで訳したくなった？

曾田：訳したくなったというか、まず自分自身がすごく力づけられて……。休日に喫茶店で読んでたんですけど、人目があるのに結構泣いちゃったんですよ。読みながらポロポロ。すごく感情移入する部分もあったし、勝手に抱いているジュディのイメージとは違う、繊細な部分っていうか……。さっき話に出ていたクレーム言ったり、スロープをつけろっていう時とかも「その時は強く出れるんだけど、そのあと身体が震えて、声も震えちゃう」って書いてあって。あとはこれまで出てきた話と繋がっていると思うんですけど、一人ひとりの仲間を凄く大事にしてたんだなという様子とかがすごくよくわかる本で。「これはみんなには届けない」とは思ったんですけど、翻訳するってなったらものすごい作業になるから……。

盛上：佐藤：分厚いからね。

曾田：そうなんです。できるのかな……。って気持ちがちよっとあったんですけど、そこは、まちゃみがですね、「行けー！」って（笑）。いつも良いプッシュしてくれるなあと思っていて、まちゃみが居なかったら訳してないと思います。

盛上：あらら。

曾田：本当にそれは思います。でも翻訳する作業はしんどくはなかったですね。すごい楽しかった。毎朝「今日はどんなことジュディ言うかな」ってワクワクしたり、ジュディの考えを深く知ったり、感情とか経験の追体験を深くすることができた。あとは「どうやって日本の仲間たちに一番うまく伝わる言葉になるかな」っていうのを常に考えながらだったので、そういうのも含めてすごく良い時間でしたね。

盛上：こういう本ってさ、そういう思いを持って訳すのが一番じゃん？でもジュディという名前が知れてる分、ちょっと油断したら誰かにやられちゃうと思って。曾田さんはどうかなと思ってすぐジュディに電話して「誰にもやらせないで。曾田夏記がやります」と言って許可とったの。

佐藤：尾上さんが言ってたけど、クリップ・キャンプ（映画）を見て同じシーンが出てくるらしいんだけど、映画の日本語訳だとよくわからない。連邦政府のところを立てこもったときに公聴会で言うセリフがあって、それは曾田さんの訳が気持ちも伝わってとってもいいって言ってたよ。

盛上：あれは有名なシーンだ。

曾田：いえいえ。ありがとうございます。

佐藤：だから映画見る人はあの本も横に置いてみた方が良さそうです。



鼎談中の曾田さんと盛上さんが楽しそうに話している様子

曾田：私が日本語をどう訳しようかなと迷った時、思い浮かべていたのって、あの、自分がセンターとかで活動していると、ジュディが言ってるようなこと、悔しい思いとか排除された時の傷を聞くじゃないですか。そうやって聴かせてもらった言葉を思い出して、引っ張りだしてくるような感覚で。私もし JICA に居続けたら同じような形では翻訳できなかったらと思うましたね。そこはすごく STEP えどがわにも感謝しています。

佐藤：タイミングが良かったんだろうな。いつもジュディの紹介する時に、日本でいえば坂本龍馬みたいな人だからと俺はいうんだけど、日本人で坂本龍馬に会ったことある人日本中で誰もいないでしょ？皆さん、アメリカの坂本龍馬ジュディには今なら会えますよ。IL 運動を始めた最初の人たちで、パークレーの CIL を作ってやってきた人で、ジュディとか居たから色んな事が出来て、法律も出来て、社会が変わって、それが巡り巡って日本にも伝わってきて、IL センターができて、差別解消法も出来て。幸いなことにまだ生きてるから会えるし、その人の話を本で読むことによって、自分達の運動をもう一回振り返り、諦めてすぐ妥協したら、ジュディみたいに頑張らなアカンなという戒めにもなる。自分自身が励まされてやる気が出る。そういう本ですね。障害者なら誰が読んでも共感して、また頑張りたいかなんじやないかなと思う。尾上さん大絶賛だからね。連続で色んなのやりたいと言ってたよ。

曾田：一回、この本の出版が少し行き詰った時があって。現代書館の担当の向山さんから「翻訳本をやるのは初めてで、すごいプレッシャーで、良い本だと言われたらいいのがあるって、そこから考えすぎて動けなくなった」みたいなことを相談された時に、何のためにこの本を出すんだろうね、みたいな話を改めて2人でして。私自身は、出版してからちょっと訳が変とか、批判とか色々あったとしても、一人でもいいから「ここが心残った」とか「今これを読んで救われた」みたいなのがあれば、もうそれで十分だなと思っていて伝えました。とはいえ、本が出るまでは向山さんも私もドキドキしてて、最初の読者が（解説を書いてくれた）尾上さんだったわけなんですけど。尾上さんが「二十代の時に読んでたら、人生変わっていた一冊でしたよ」と色々と言ってくださって、向山さんも私もすごく励まされました。

佐藤：いい本を出してくれたなと思ってますよ。

盛上：あの量はなかなか大変だよな。

佐藤：何ページあるの？

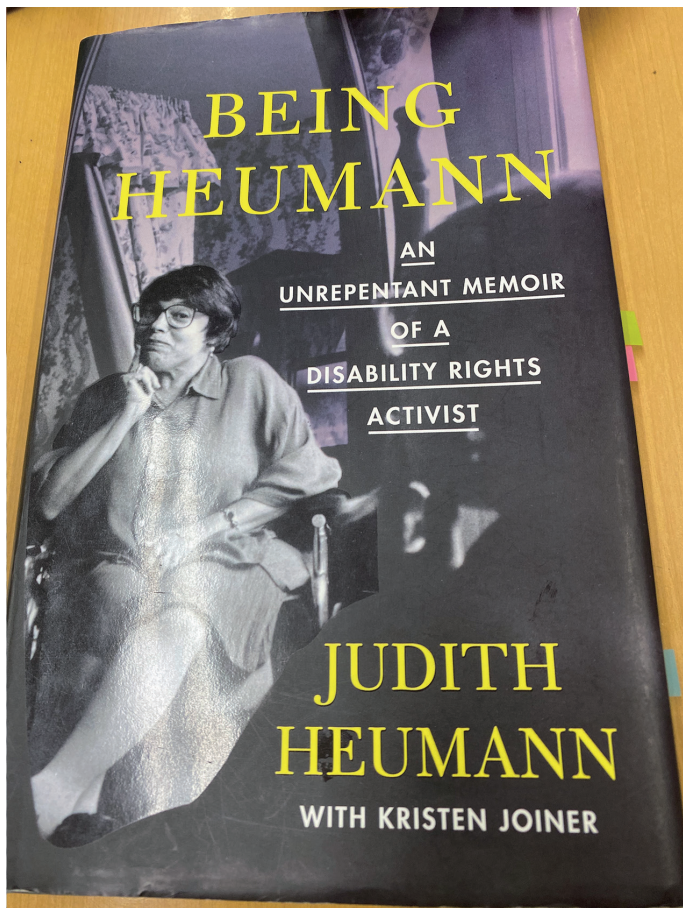
曾田：日本語版だと、300 何十ページなので。ちょっと読むのが大変でした。

## ■本で印象に残ったフレーズ

曾田：印象に残った箇所、尾上さんとたまたま一致していたんです。

盛上：えー、すごい。やっぱりそういうもんなのか。

曾田：私、ここの箇所を読んだとき「佐藤さんが言っていたことだ！」と思って。最後の方に出てくるんですけど「変化というものは、私達が思うようなスピードでは決して起こらない。人々が一緒になって戦略を立て、分かち合ってあらゆる取っ手に可能な限り手をかけてみて、そうした年月の積み重ねがあって、初めて変化は起こるものだ。少しずつ苦しいほどゆっくりとであっても、物事は動き出す。そし



ジュディの自伝、英語版の表紙

てある時突然、まるで青天の霹靂のように変化が起きるのだ」っていう箇所です。佐藤さんも前「運動って、ある日突然風が吹く。向かい風で全然進まないときもあるけど、ずーっとやっていれば、ある日それが突然実ることがあるんだよ」みたいなことを言っていたな・・・って。この文章を読んだ時に思ったんですよね。この本、300頁中100頁ぐらいは504条項デモのことが書かれているので、「504条項デモがジュディの人生にとって胆だったんだな・・・」って感じて、みんなで一つになって社会を変えようとしたときに、どんな事が必要かというのをすごく感じさせてくれる本だなと思いました。例えば150人とかデモ隊がいるなかで、全員一致で賛成になるまでは絶対に会議を終えないとか、深夜3時になっても最後の一人が意見を言うまでは絶対待つとか、手話通訳の準備が出来るまでは会議を絶対始めないとか、徹底していて。さっきの一人ひとり大切にしているところもそうだし、一つにならなきゃ絶対勝ち目はないからみんなでやるんだ、みたいな。それこそ、みんなで「あらゆる取っ手に手をかけて」苦しいし、全然進まないけど、でも504条項だっで一瞬のシーンじゃなくて何年もかけて勝ち取ったこととか、ADAも8年、9年とかやっていたことが書かれていて。そういうエピソードを読んだあと、最後にさっきのフレーズを読んだとき、すごく説得力があって印象に残ったんですね。そういう運動のやり方こそが本当の変化というか、障害者自身も変わるし、社会も変えていくのかなと本を通じて影響を受けました。

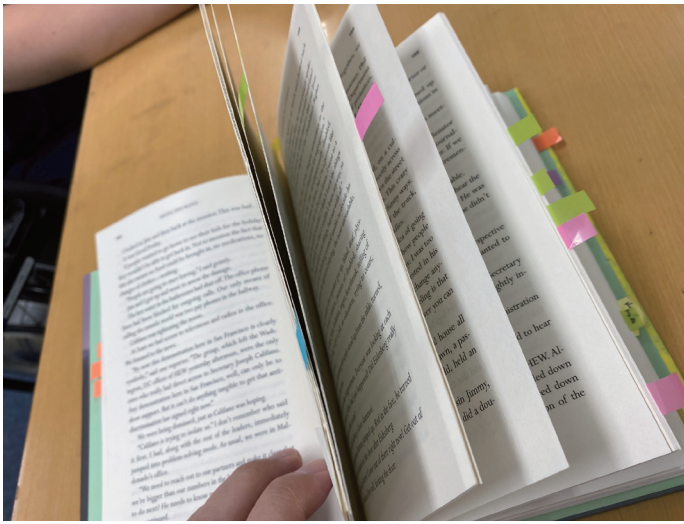
佐藤：国が違って、文化もシステムも違って、やっぱり同じなんだと、聞いていて思いました。うまくいかない事ばかりが続いていて、けどある日突然追い風が吹いて、ガンガンうまくいくときがあるんだよね。チャンスは絶対来るよ。続けていたら必ず来るからね。まさみ、何か言っておきたいことある？

盛上：当事者同士が共感したりとかは勿論当然な事だけど、私にとってジュディは、私みたいな事務局とかそういう立場の人間でも何でもこの運動をやるのかっていう事を気づかせてくれた。当事者がやるから、それを手伝うためにいるんじゃないって、こういう社会であってほしいというビジョンを自分自身もきちんと持って、ただ当事者についていだけではなくて、運動をしなくちゃいけないということに気づかせてくれたのはジュディだったんですよ。

正直言うと、ダートさんのところってダートさんのお仕事を手伝わせてもらったし、訳も分からずやらしてもらってる状況だから、とにかくついていけばいいし、行ったところではダートガールズはある意味守られてたというか。そこはダートの女の子達がやってくれるところねって言って守られてる。だけど、ジュディと初めて働いて、外の社会に出た時に、社会が持つてくる偏見・介助者への偏見、如何に蔑まれて見られているかということを知らなかったんですよ。けど世銀に入って、ハーバードとかスタンフォードとか有名大学出身の人達がいっぱいいて、でも自分は自分なりに障害者運動に興味あってジュディについてきたつもりだったけど、ふっと気が付いたらジュディのトイレ介助をする人は「そこで黙っててね」みたいな。すごいあからさまにチーム内でそういう態度を受けて、それがあある意味カルチャーショックだったというか。まだ私も若かったから余計に自己実現に苦しんでるときだったから感受性が高かったんだと思うけど、傷ついたし、何でもこんな扱いされなきゃいけないんだと思ったし、それをジュディに話したというか泣きついたんです。悔しさとかで泣いてたらジュディに、今までダートと一緒にいて、今ここに来て、何のために障害者運動をやったって言われたんですよ。この運動は社会から決めつけられる言葉に対してNOって言う運動でしょって。自分はできない、これはやっちゃダメ、あなたはこれしかできないはずだって言われることに対して、NOって言う運動をあなたはしてるんだから、自分のためにその運動ができなきゃだめだって言われたんですね。そういう意地悪なチームメンバーがいたんですよ。彼女はまさみがNOって言うまであなたへのその扱いは続きますよって。彼女を止めるのはあなたしかいない。まさみがNOと言え止まります。止めるか止めないかは自分次第だって言われたんですよ。そこで私はもうちょっと慰めて欲しかったし、それでもいいよ、まさみは頑張ってるよって言われたかったのに、今思うと当たり前なことなんだけど、その時はガーンときてショックだったんですけど。でも、勇気を出して、私そんな事言



曾田さんが翻訳の時に使っていたジュディの自伝英語版  
たくさん色分けされた付箋がついている



ページを開いたジュディの自伝英語版

われる筋合いございません的な態度を少しずつ見せてったら本当に止まるんですよ。ジュディの言ったとおりだなと思って。そういう風に私達にも、あなたは障害者運動を言われた通りやっていけばいいのというような感じで私達を連れていくじゃなくて、人生で大事な事をそれぞれが戦わないといけないものを持っていて、その根底はみんな一緒に、やっぱり人の尊厳だったり、自分らしく生きてることだったり、そこがあって障害者運動の中にあることに何の迷いもなくなったというか、逆を言うと、ここでやっていきたいという気持ちが凄く強くなった。

佐藤：やっぱり読みたくなる本だろうなと思う。日本で運動をやって関わっている人は、読んだら自分もエンパワーメントされるし、自分のこれまでを振り返って、これからどう生きていこうかなという事をまた考えられるから。国が違ってやっぱり偉大なリーダーの話は聞いてみたい。そういう意味でお勧めだな。

曾田：みんなの読書感想というか、感想をシェアする会みたいのがあったらいいなって思いますね。

盛上：やっぱりジュディがすごいんだけど、この本で感じることによって、当事者が語ることのインパクトがあるってことを私はよりみんなに知ってもらいたいと思う。

勿論ジュディの話だからすごいんだけど、そういう話をみんなが持っている、それを語る・見せることがやっぱり一番。そういうものに惹かれて私もここまで残った身だから、やっぱりみんなの話聞きたいね。

曾田：そのこと、ジュディが言っていましたね。アメリカでも昨年この本の刊行記念イベントがいくつかあって、翻訳していたので何個かオンラインで参加したんです。その時にジュディが、「今回は私が自伝を書くことになったけど、みんな一人ひとりそれぞれのストーリーがあって、そこに『これは聞かすべきストーリーだ』とか『この人の話は別に大したことないストーリーだ』とかそんなのはない」という話をして。自分史の中のどのストーリーを語りたか自分でわかっている事とか、それを伝える事でどうしたいかとか、ほかの人のストーリーを聞く事の大事さとかをジュディが話しているのを聞いて、それは国が違っていても同じだなと思いました。

佐藤：お父さん喜んでるだろうね。どう、お父さん読んで？

曾田：めっちゃ喜んでる。いえ、まだ読んでないです。

佐藤：楽しみにしてるでしょう？

曾田：そうですね。嬉しいみたいです。

佐藤：それは嬉しいわなあ。お父さん小説家だから、娘が本を出したらね。

盛上：ここまで長い翻訳したの初めて？

曾田：いや、もう全く初めてです。その、いつもは頼まれて会議の資料の翻訳とかくらいしかないので、本を一冊というのは全く初めてで・・・。

佐藤：じゃあまた他の国の人が自伝書いたら。

曾田：自伝専門・・・(笑)

佐藤：朝コツコツと？

曾田：ちょっとしばらくは遠慮したいです・・・(笑)  
(一同大笑い)

佐藤：ありがとうございました。



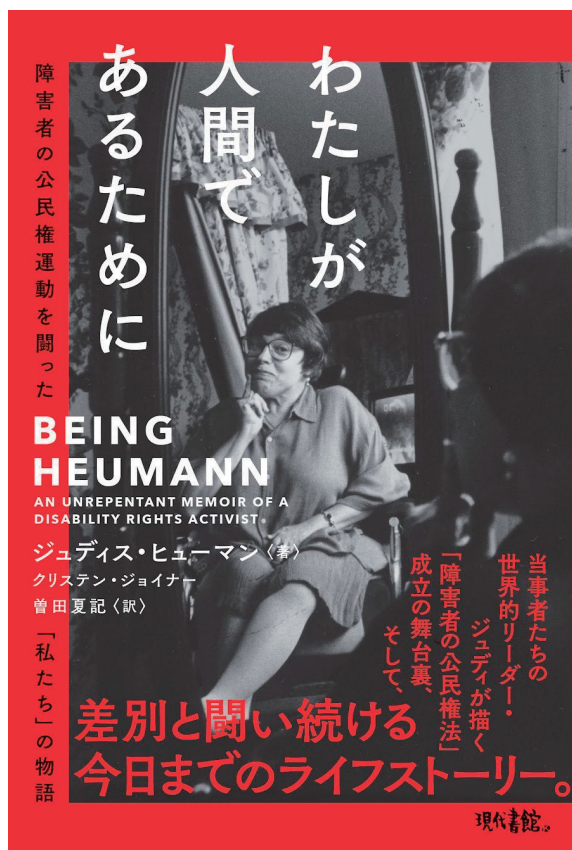
鼎談中の3人 曾田さんが右手をあげながら何かを説明している様子

ご紹介させていただいた、ジュディス・ヒューマン自伝の日本語版

## 『私が人間であるために』

障害者の公民権運動を闘った「私たち」の物語』

全国書店、Amazon、紀伊国屋書店ほかウェブサイトにて、**絶賛発売中！**



日本語版ジュディの自伝の表紙

ジュディス・ヒューマン 〈著〉

クリステン・ジョイナー

曾田夏記 〈訳〉

発行 現代書館

### 内容

1964年の公民権法から取り残され、「二級市民」でもなかった米国の障害者たち。そこに風穴を開けた「リハビリテーション法 504 条項」誕生の背景に、当事者たちの粘り強い運動があった。リーダーとして政府機関に乗り込み、25日間占拠したジュディス・ヒューマン。障害を理由に学校や就労から排除され、それでも「人間であるために」闘ったジュディが、今日もなお差別と闘い続ける「私たち」へ贈るライフストーリー（監訳：中西由起子 解説：尾上浩二）。

#### 【紙版】

定価 2500 円+税

全国書店、Amazon、紀伊国屋書店ほかウェブサイトにて

\*テキストデータ請求券つき

#### 【電子版】

定価 2200 円+税

Amazon、紀伊国屋書店ほか電子書籍販売サイトにて

QRコード



Amazon



紀伊国屋書店